川崎市教育委員会賞受賞作品

コロナになってわかったこと

栗木台小学校　６年生　森田　正貴

「ぼくは将来フロンターレに関わりたい。」こんなふうに思ったのは五年生のときだった。ぼくはサッカーが好きだ。だからこんなふうに思ったというのもある。でも将来のことを考えたのは五年生のときにあることがあったからだ。

ぼくは小さいころからサッカーが好きだった。保育園でもサッカーをしていた。小学生になってからも六年間、フロンターレに通っている。でも五年生の時にフロンターレに行けない週が何日も続いた。

「緊急事態宣言を発令します。」

最初は何を言っているのかわからなかった。でも、そのあと学校も休みになってもちろんフロンターレも休みになった。家ではものすごくたいくつだった。何をすればいいのかわからない。フロンターレでも、学校でも課題を出された。でもみんなとやらないと楽しくもないしつまらなかった。それでぼくは知った。今まで当たり前だったことがその時になってすごく楽しかったんだと気がついた。

二ヶ月ぐらいたって学校もフロンターレもやっと行けるようになった。それでも消毒やマスクなどのコロナ対策はてっていされていた。でも、家で一人でやるよりは何倍も楽しかった。学校で先生が言っていた。

「みんなが帰った後、一人一人の机を消毒しているんだよ。」と言われて気がついた。学校やフロンターレに行けているのは、コーチや先生が支えてくれていたからなんだとわかった。フロンターレのバスにも消毒が置かれていて、コートの中に入る前にも検温と消毒をした。ニュースでもいろんなスポーツのプロ選手たちがコロナで困っているということを知って、今の自分たちと同じだなと思った。ぼくたちと同じということは、ぼくたちと同じように支えてくれている人がいるんだと考えた。そう思うとコロナの中がんばっているプロ選手たちももちろんすごいけれど、それを支えている人たちはすごいし、かっこいいなと思った。

今までぼくはこんなことを考えたことがなかった。やっていることが当たり前だと思っていたけれど、実際は先生やコーチなどいろいろな人たちに自分は支えられているということが、コロナになってわかった。そう考えていたら、ぼくもやってもらっているのだから恩返しがしたいなと思った。ぼくは勉強は好きではないし、得意ではない。だから先生には向いてないと思う。でも、サッカーは好きだし、得意だ。そのことを使っていろんな人をぼくも支えたいと思った。川崎には川崎フロンターレというチームがある。未来でもコロナが流行しているかはわからない。でもぼくが経験したことを未来に生かしたい。だからぼくが六年間いろんなことを教わった、川崎フロンターレでいろんな人を支える。これがぼくの夢だ。